

理知の過誤、「影の女性」の場合 ブレイクの『ミルトン』第18 [20] 葉について

Satanic Failure Conceived by Shadowy Female: Blake's *Milton*, Plate 18 [20]

川崎 則子
Noriko KAWASAKI

Abstract

This paper discusses one passage from William Blake's *Milton*, plate 18 [20] lines 1-25. In this passage, a character called the "Shadowy Female" plays a vital role to anticipate the failure of the scientific and self-righteous side of Satan's mind. Furthermore, her counterpart or spouse, Orc, plays in some way a role as her mirror-image, as shown in lines 26-50. Beulah is the intermediate area between Eternity and the phenomenal world called Ulro. This area, with its imagery of twenty-seven Heavens and Palestinian topography in Ancient Judea, sets the background in which Shadowy Female is active. The preposition, "over," which is used three times in this passage, implies that the Shadowy Female is akin to Satan, through its association with another Satanic expression, "cover." As is often found in Blake's descriptions of the feminine métier, her Satanic failure of taking the Human Form as her own is alluded to with the metaphor of clothing.

キーワード：イギリスロマン派、ウィリアム・ブレイク、ミルトン、サタン、影の女性
British Romanticism, William Blake, Milton, Satan, Shadowy Female

『ミルトン』第18 (20) 葉は、Copy C において付加されたプレイトのうちの一つである。付加の意義は、拙論「サタンの超克」第一稿¹⁾で触れたが、単に枚数を50葉に揃える為ではないかとしている W. H. Stevenson さえ、みずから推しているように²⁾、サタンの自我意識の誤謬を詳らかにするためのものである。

本葉冒頭第1行は前17 [19] 葉に繋がることになるため、ユリゼンが見つめる対象が、「不死なる者」(the immortal Man) に続いて、“Man”を構成する四つの活物の一人、水の精霊サーマスと、及び、同じく火と愛の精霊ルーヴァ、その現象相であるオークへと収斂していくあしらいとなっている。オークと、その対のように彼に伴う「影の女性」とは、サタンの理知に絡む誤謬を語るに欠かせない要素となっており、付加されたプレイト第3葉、第10葉ともに、両者が出現している。

付加されたプレイトで最も付番の若い第3葉第40~41行には“First Orc was Born then Shadowy Female: Then All Los's Family / At last Enitharmon brought forth Satan refusing Form, in vain” (初めにオークが生まれ、次に影の女性が生まれ、/そしてロスとエニサーモンの全家族が生まれ、最後にエニサーモンはサタンを生み出した、無益に [形] を拒むサタンを) とあるように、オークと影の女性とは、サタンに結節してゆく心的傾向の前駆状態と言い得る。

同じく挿入された第10葉第1~2行にも“Then Los & Enitharmon knew that Satan is Urizen / Drawn down by Orc & the Shadowy Female into Generation” (そしてロスとエニサーモンとはサタンがユリゼンであることを知った、オークと影の女性とによってこの世への引きずり込まれ、生まれさせられたものなのだ) とあり、第3葉第40~41行の視点を変えただけの同工異曲ないし変奏であることが知られる。³⁾

And Tharmas Demon of the Waters, & Orc, who is Luvah

The Shadowy Female seeing Milton, howl'd in her lamentation
Over the Deeps, outstretching her Twenty seven Heavens over Albion

そして、大いなる水原（みなはら）の精霊たるサーマスは、そしてルーヴァたるオークを、

また「影の女性」は、ミルトンを目にして、嘆きのうちに、声を挙げ、
その声を深みに覆いかぶせ、みずからの二十七天をアルピオンの上方に展延した。

この影の女性は本18 [20] 葉の約半分にわたって、サタンの利己的自我の半面を構成する女性的過誤を開陳している。同葉の後半で、オークはそれを批判し、対峙するはずが、自らもその誤謬に絡め取られて、まさに前半部と後半部が鏡像と化して好一對を成している。

「影の女性」の所轄に帰せられる「二十七天」は、後に第37 [41] 葉に詳述されるが、ビューラの悪相で、サタンの会堂である（I beheld Milton with astonishment & in him beheld / The Monstrous Churches of Beulah, the Gods of Ulro dark / Twelve monstrous dishumanizd terrors Synagogues of Satan. / A Double Twelve & Thrice Nine: such their divisions. <M37 [41] : 16 18> 私はミルトンを驚きのうちに見た、そして彼の内に見出した / ビューラの怪異な諸教会を、暗いアルロの世界の神々を / 12の怪異な、人間性を剥奪された諸齋威を、サタンの諸会堂を。 / 12の2倍と、9の三倍、これがそれらの分派の仕方）

ビューラは、永遠界、現象界（アルロ）という二つの界面の緩衝領域であるがために、『ミルトン』において、要所々々で、メルクマールとなっている。第一部冒頭第2葉で詩神としてビューラの娘達が勧請されるのに続いて、ミルトンが旅する領域としてのビューラが描写され、吟唱詩人の部が終わって「ミルトン降下の部」の開闢となる第14葉、第15葉で、ミルトンの旅路にダイレクトに関わり、その後、ミルトンの女性配偶であり、ビューラの娘の一人であるオロロン降下を扱う第二部では本格的にその様相が展開される。⁴⁾ その他、第12葉では、サタンの女性配偶ルーサがビューラの娘の一人として、要らぬ手出しが引き起こした混乱に恐れをなしてビューラに逃げ込む様子が活写されていた。⁵⁾

また、ビューラの下にあるとも描写される二十七天は、サタンと直結する「利己的正義」でもある。『ジェルーサレム』において、「サタンの製粉所の水車の輪」(the Satanic Wheels / 13 : 37) に擬せられるところの、この世の姿を映した「独善的正義」(self righteousness) と表現される（“... in the Twenty-seven Heavens beneath Beulah: / Self-righteousness conglomerating against the Divine Vision:” / 13 : 51 ビューラの下に二十七天において / すなわち、「聖なる視像」に反して集合した数々の「独善的正義」において）。

ビューラはイザヤ書に於いて、“thou [Zion] shalt be called Hephzibah and thy land Beulah: for the Lord delighteth in thee, and thy land shall be married.” (Isaiah, lxii : 4 あなたは「わが喜びは彼女にある」ととなえられ、 / あなたの地は「配偶あるもの」 <ビューラ> ととなえられる。 / 主はあなたを喜ばれ、あなたの地は配偶を得るからである。) ⁶⁾ とあるように、パレスチナの地誌と結びついている。ビューラの下に二十七天に伍する、十二の二倍と称せられるアジアの諸神⁷⁾ もパレスチナの諸地域と結びついており、前17 [19] 葉において、ミルトンの妻娘6人が古代ユダヤ教世界の各地に擬せられ、下界アルロの残酷性の表徴とされていたことと呼応している。

「覆いかぶせ」と訳した第3行の over は、次の第5行、12行にも用いられ、「影の女性」の重要な属性となっている。「覆う (over) という彼女の特性から「覆う智天使」(Covering Cherub) と呼び慣わされるサタンの理知的過誤に結節してゆくことが、字義音韻ともに連動して効果を挙げている。第9葉を振り返れば、「憤りの智恵」を知らず、「哀れみの知恵」しか持たぬサタンが、その「憤り」と「哀れみ」の分裂を、配偶を事とするビューラの微睡みを奪われた「死の床」の経験として苦しむとき、その理知的過誤 (Covering Cherub) の領野はローマ、バビロンとチルとされていて、パレスチナを巡る世界に回帰するのだった。⁸⁾

「影の女性」の「覆う」行為は、女性の職分が、男性の職分である「鍛冶」に対して、「機織り」(weaving) であることから「衣服・服飾」の暗喩に関わって、「衣服で覆う」ことに集中する。また、伝統的にギリシャの比喩では、「肉体」とは魂が着る「衣服」であるとあらわされることや、女性が、現世の肉体の形成、誕生に携わっているとされることから、現世の欠陥を視覚化する役割を果たしている。だが、それをしも、サタンの分析知と結び付けているのは、次行“articulate” (分節した) の語の働きである。

And thus the Shadowy Female howls in articulate howlings

I will lament over Milton in the lamentations of the afflicted

My Garments shall be woven of sighs & heart broken lamentations

理知の過誤、「影の女性」の場合

The misery of unhappy Families shall be drawn out into its border
Wrought with the needle with dire sufferings poverty pain & woe
Along the rocky Island & thence throughout the whole Earth

[Milton ,18 [20] : 4 ~ 9]

そしてこのように「影の女性」は明晰に分節された言挙げを言い募る...

私はミルトンの身上を嘆くのだ、心苦しむ者達の身上を思うその嘆きのうちに
私の着衣（きごころも）は溜息と心破れし嘆きとで織られよう
幸薄き一族の暗澹は、その汀（みぎわ）まで引き伸ばされ、
針を打ち留められて呻吟し、貧困と痛みと悲痛に喘ぎ、
岩がちな彼島（かのしま）へ、さらに地上全土へと引き伸ばされる

第5行、「影の女性は」ミルトンのことを嘆く（lament over Milton）という表向きの意味のほかに、ミルトンを嘆きの衣の中に覆いくるむという含意がある。従って第6行には、文字通り、私（影の女性）が織る衣服は嘆きを材料として織られるのだと謳われることになる。「その上に一面に覆う」（so as to cover or touch a whole surface, COD 2）⁹⁾を含意する“over”の魔力は、その悲惨な衣服の布地を「洗い張り」でもするかのように展延し、アルピオン（イギリス）を指す岩がちな島から大地全土へと経巡る。

この衣服、または布地に囚われるのは、下記にみるように、病める「父」とその家族すなわちユリゼンとその一族である。『ミルトン』においては、第一稿（1990）に述べたように、ユリゼンはサタンの予型であり、またユリゼンの予型はアルピオンであるから、18f 20 葉の第9行から第11行は、アルピオンからユリゼンへ、さらにサタンへと結晶していく過程とも見ることができる。囚われ人は、石の地下牢に囚われた囚人、製粉所（理知作用の本拠でサタンの仕事場）の奴隷と呼ばれて、サタンその人であることが暴かれる。

There shall be the sick Father & his starving Family! There
The Prisoner in the stone Dungeon & the Slave at the Mill

[Milton ,18 [20] : 10 ~ 11]

そこには病に伏す父とその飢えたる家族が出現しよう！ そこには
石の地下牢につながれた囚人が、また製粉所につながれた奴隷とがみられよう。

地下牢（Dungeon）には、洞窟（Cave）との近縁があり、前17 [19] 葉後半の“Concave Earth”はプラトンの洞窟の比喩との関連が見出されることを第13稿（2002）で指摘しておいた。この「くぼんだ洞勝ちな大地」がピューラ下の二十七天と直結していることは、“... twenty-seven folds of opakeness”（M17 [19] : 26、二十七折の不透明さ）との表現でも知られる。ちなみに、ここで注目している関連イメージ、“Caves”, “covers”, “the slave”, “mill”, “dungeon”, “Slaves”, “prisoners”が、『四つの活き物』（*Four Zoas*）第九夜、国々を穀物に譬え、ユリゼンがからざおで打ち、サーマスが扇ぎ分ける場面で、勢ぞろいしている（Page133 line650 { IX650 } ~ Page134, line34 { IX685 }, E402 403）。また、本10~11行の、石牢と製粉所の囚われ人の暗喩がパラレルに使われているものとして、『ジェルーサレム』第20葉の「人が前の生を思いおこし、その一瞬一瞬を何度も数えてひとつひとつ、悲しみの糸に通すように、記憶の糸にひとつつながりに通し」というリリカルな描写の前景をなす苦悶の描写が挙げられる（*Jerusalem* 20 : 15 18）。

次段で「影の女性」は全世界に書き物を施させようという意志を示すが、無論、ここにも服飾の含意がある。全土を「人の言葉」で覆いくるもうという衣服の謂いである。「影の女性」にとっては、自らの言葉は、ブレイクの語法で永遠の不滅性を指す「人の」（Human）を冠せられるにふさわしいものだが、無論これはサタン特有の僭称に準じているに過ぎない。『ジェルーサレム』終盤で“... every word & Every Character / Was Human according to the Expansion or Contraction”（J98 : 35 36、あらゆる言葉、あらゆる文字は人の姿、拡張や収縮の度合いに応じて）と謳われる生きた不滅の言葉ではありえない。

理知の過誤、「影の女性」の場合

I will have Writings written all over it in Human Words
 That every Infant that is born upon the Earth shall read
 And get by rote as a hard task of a life of sixty years
 I will have Kings inwoven upon it, & Councillors & Mighty Men
 The Famine shall clasp it together with buckles & Clasps
 And the Pestilence shall be its fringe & the War its girdle
 To divide into Rahab & Tirzah that Milton may come to our tents

[Milton ,18 [20] : 12 ~ 18]

私はその全面に書き物をものさせよう、「人の言の葉」で書かれた書き物を
 地に生まれたあらゆる幼な子がその書き物を読むように
 そして彼らが誦んじるように、六十年の人生における辛い労苦として、
 私はその上に諸王を織り込ませよう、また評議員や有力者を織り込ませよう
 「飢え」には留め金や鋏でその衣服を留めさせよう
 そして「疫病」にはその裾飾りとならせ、「いくさ」にはその腰帯とならせよう
 レイハブとターザに分かれて、ミルトンが我々の幕屋を訪れるように

「人の言葉」を騙る「影の女性」の言辭は、幼な子が一生、覚えこまされるものとされているところからも、その欺瞞性が窺われる。ブレイクにあっては、無論、「記憶」は、「想像」に対置される望ましくない働きなのである。「影の女性」が紡ぐ言葉が衣服となることを、第15～18行は活写している。アルピオン ユリゼン サタンと、予型がより輪郭の明らかな特性に特化して現じたように、茫洋とした「影の女性」もレイハブとターザの姿を露わにする。諸王を織り込み、「飢え」を留め金や鋏として、「疫病」を裾飾りとして、「戦禍」を腰帯とする衣服は、やはり布地からなる「幕屋」に帰する。古代ユダヤ教の神聖な神の場として宗教の殿堂であると同時に、政の場として世俗権力とも結びつくその「幕屋」に。その如何にも男性的な誤謬の場と見える頭脳の中枢に、さ女性性に帰せられるレイハブとターザを配しているのが、いつもながらのブレイクの鋭敏さである。ここでもサタンの男性性の裏側には女性性が裏打ちされている。

「影の女性」の僭越はついに第19行において、「人の形」を身に着けると公言するまでにいたる。サタンが自らの職分に飽き足らず、「人の形」をいたずらに望んだように、彼女も「人の形」を篡奪せんとするのだが、最前からの衣服の縁語で、「人の形」を「着る」と表明する。且つ、先ほども見たように、自らは「記憶」の徒でありながら、「想像」(Imagination)の具象化である「神の姿」(Image)を纏おうとする。ブレイクにあって、神性の根本をなすイエスの、「哀れみ」と「人間性」を纏おうとしてみても、「影の女性」みずから認めるように、その「衣服」は「残酷性」に彩られたものとならざるを得ない。そこで彼女が纏うものは、ブレイクが厭悪した「神秘」をこととする「宗教」の「聖性」(Holiness)へと墮して行く。「聖性」を古代ユダヤ教の祭司が身に着ける胸当てや兜になぞらえた「影の女性」は、その胸当てを飾る貴石とも比すべき装飾を身に付けながら、それが不安、懸念、絶望、死へと褪色していくのを目の当たりにする。さらに、罪の後悔、悲しみ、処罰、恐れへと、見る影もなく落魄してゆく。

注目すべきは、その落魄を「影の女性」自身は、自らを守るためのもの、しかも自らの配偶であるオークから守るためだとして
 いることである。

For I will put on the Human Form & take the Image of God
 Even Pity & Humanity but my Clothing shall be Cruelty
 And I will put on Holiness as a breastplate & as a helmet
 And all my ornaments shall be of the gold of broken hearts
 And the precious stones of anxiety & care & desperation & death
 And repentance for sin & sorrow & punishment & fear
 To defend me from thy terrors O Orc! my only beloved!

[Milton ,18 [20] : 19 ~ 25]

理知の過誤、「影の女性」の場合

なんとになれば私は「人の形」を身にまとい、「神の姿」を取り、
 「哀れみ」や「人間性」まで騙り取ろう。だが私の「衣」は「残酷さ」となるのだ
 そして私は「聖性」を身にまとい、それを胸当てとも兜ともしよう
 そして私が身に付ける飾りはすべて、黄金は傷心からなり、
 貴石は、心配、気がかり、絶望、死から
 そして罪を犯した悔やみ、悲しみ、断罪、恐れからなるものとしよう
 私の身を汝の脅威から守るため、おお、オーク、私が唯一愛するひとよ！

義を主張し、倫理と浅薄な哀れみを持つ未熟な精神の行き着く果ての荒野は、我執により自らの立地の基盤がゆらく日常的経験に通底する。「影の女性」の困難は、みずからの配偶に束縛を感じていることだが、これとても普遍を外れるものではない。「影の女性」の姿が合わせ鏡に映る配偶を引き出すように、オークが呼び出される。本葉後半はオークの登場と、両者の鏡像関係の展開がなされることになる。「影の女性」は、各作品の中で、幕前の呼び出しのように地味な役回りを与えられている場合が多いが、扇の要のような支点として、各所で機能している。

註

原詩の引用、プレートの番号、行数は、全て次の版に依る。David V. Erdman ed., *The Complete Poetry & Prose of William Blake* (New York: Anchor Press / Doubleday, 1982) 本書の頁を示す場合は E261 のように表記する。

- 1) 拙論、「サタンの超克 ブレイクの『ミルトン』について (1)」『岐阜市立女子短期大学研究紀要』第39輯、1990、平成2年3月 (pp. 39~45)。
- 2) W.H. Stevenson, *BLAKE: The Complete Poems*, second edition (London: Longman, 1989) p. 575, notes on Pls 10, 18: "An attempt to fit Orc into Milton? In 18. 26-51 the Female puts on a Human-Divine show, which (26-29) being an incomplete person, she may not do. Her pseudo-humanity is a Satanic false covering (37. 8n; 10. 1-2). In Generation (Orc is the Generative form of Luvah) this means Urizen. Sc (Pl. 18) Urizen attacks Milton in a product of the Shadowy Female's evil deed and Orc's inevitable reaction (18. 31-33, 46-50)."。
- 3) Jason Whittaker, *William Blake and the Myths of Britain* (London: MACMILAN, 1999) pp. 28-29 に、オークと影の女性について北歐神話と絡めた論及がある。
- 4) "Then on the verge of Beulah he beheld his own Shadow; / A mournful form double; hermaphroditic: male & female / In one wonderful body. and he entered into it / In direful pain for the dread shadow, twenty seven fold / Reached to the depths of direst Hell, & thence to Albion's land: / Which is this earth of vegetation on which now I write." (M14 [15]: 36-41、そしてビューラの端にミルトンは自分の「影」を見た / 悼ましい二重の身体で、両性に囚われ、男であり女であり / ひとつの見事な身体の中で。そしてミルトンはその中に入った / 恐ろしい痛みのうちに、その恐ろしい影、二十七折れの影で / 恐ろしい地獄の深みに達し、それからアルピオンの土地に達した / それがこの生成の大地で、そこがまさに私がいま、この詩を書いているところなのだ) "But as a wintry globe descends precipitant thro' Beulah bursting, / With thunders loud and terrible: so Milton's shadow fell / Precipitant loud thundering into the Sea of Time & Space. ... Then Milton knew that the Three Heavens of Beulah were beheld / By him on earth in his bright pilgrimage of sixty years" (M15 [17]: 44-46, 51-52、しかし冬の球体がまさかさまにビューラを炸裂して降下するように / 大音声の恐るべき雷鳴をもって、そのようにミルトンの影も落ちた / まさかさまに大音声の雷鳴をとどろかせながら時空の海へと ... そしてミルトンは悟った、ビューラの三重の天とは六十年の輝かしい巡礼の間地上で目にしていたものであったと) ビューラの良相悪相の両義性については、Peter Otto, *Constructive Vision and Visionary Deconstruction: Los, Eternity, and the Productions of Time in the Later Poetry of William Blake* (Oxford: Oxford University Press at Clarendon Press, 1991) p. 65-67 に言及がある。また、Peter Otto はその後、*Four Zoas* を扱った近著 < Peter Otto, *Blake's Critique of Transcendence: Love, Jealousy, and the Sublime in the Four Zoas* (Oxford: Oxford University Press, 2000) , pp. 61-64 > で、女性性と絡めたビューラの両義性をサーマスとイーニオンの領野から説き起こして、エデンとビューラの関係性が従来のジェネレーションとアルロとの関係性の、永遠界への昇華、修

復と見る見方 (ex. Leopold Damrosch, Jr. *Symbol and Truth in William Blake*, Princeton Up, 1980) を止揚して、エデンとビューラがジェネレーションとビューラの間を単に転換し、理想化するものとする見方を提示している。ともすれば、エデンと永遠界の混淆を引き起こしがちな批評の趨勢に、四領域と、永遠界とのダイナミズムを提起したものとして注目される。さらに新しい Shirley Dent and Jason Whittaker, *Radical Blake: Influence and Afterlife from 1827* (New York: Palgrave MacMillan, 2002) pp. 139-140 においては、ビューラの対立並存を引きながら、その位置付けにまつわる従来見られがちなブレイクの女性観の理想化にブレーキをかける相対的な論及がある。

- 5) その他、前葉までのビューラ既出は、[5 : 7] [7 : 31] [9 : 48] [11 < 12 > : 4 28] [12 < 13 > : 50]
- 6) American Bible Society, *The Holy Bible containing the Old and New Testaments translated out of the original tongues and with the former translations diligently compared & revised, set forth in 1611 and commonly known as the King James Version* (New York: American Bible Society instituted in the year 1816), "The Book of the Prophet Isaiah", p. 670. 日本聖書協会、『聖書』<口語訳>(東京、日本聖書協会、2000) p. 1030.
- 7) Tyre と Sidon の地の Baal と Ashtaroth、Moab の地の Chemosh、Ammon の地の Molech、Palestin の地の Dagon、Lebanon の地の Thammuz、Damascus の地の Rimmon、Egypt の地は Osiris、Isis、Orus、を一神とみなして、Sodom の地の Gomorrah、Isles of the Sea の Saturn、Jove、Rhea で計十二神 <M37 [41] : 20 34> E137 138.
- 8) "And Satan not having the Science of Wrath, but only of Pity: / Rent them asunder, and wrath was left to wrath, & pity to pity. / He sunk down a dreadful Death, unlike the slumbers of Beulah / The Separation was terrible: the Dead was repos'd on his Couch / Beneath the Couch of Albion, on the seven mou[n]tains of Rome / In the whole place of the Covering Cherub, Rome Babylon & Tyre." (M 9 : 46 51)
- 9) OED では、“over”に“cover”の要素が時代とともに加わっていく様子を跡付けている。s.v. over, *prep.* II. 5, "On the upper or outer surface of; upon: sometimes implying the notion of supported or resting upon, sometimes (now more frequently) that of covering the surface." 1766, 1870. II.6. To a position on the surface or top of, or so as to cover; upon (with verbs of motion). 1704 Cibber *Careless Husb.* V. ii, Throw my Night-gown over me. 1861 *Temple Bqr Mgg.* I. 307 let us draw a veil over this dismal spectacle.

(提出期日 平成15年12月10日)